

に慕しき古里の土踏まんかと思へば、書く事も怪しく踊りて候。其の折こそ、心の限り仕へまつりして、受けし御惠の萬分の一をも報い奉り、浪風たゞの樂しき團居に暮さんなど思へば、人は流るる月日を惜しめども、私は今年のみは早く暮れよかしののみ思ひ居り候。小包にて御送り申しし菓子、皆々懐風御味下され度候。筆末ながら、御身大切に遊ばし、ゆめ過度なる御働きなされ給ふなと願ふも、千代もおはしませと祈る子の親の爲にて候。先は御禮かたぐ、月影爽けき夕、寄宿舎の燈の下にて、かして。

(雨評) 先づく難なき文と申すべし。

避暑先の友へ

能登國輪島 町宇河井町 杉下富美子

なつかしき君が御玉章、今宵、ひし暑き四疊半にて、くりかへし拜見致して候。僅か七日の間も、はやく三日もたちらむ心地して、いと戀しう候もの、五日のあひだ、いかにして日を送らむと、今より心もとなう候。君には母上姉君と共に、景色も空氣も清き地に、都門の塵を避けて、夏の日を送らむこと、いといと御うらやましくこそ。紫の霞、朧の裳をひく伊豆の島山は、君に御歌をすゝむべく。天津乙女が奏つる

が如き松風聲は、君に得意の彈琴をうながし申すべく。これまた、いとく羨しう候。オゾンに富める、白砂青松のあたり、櫻貝などを拾ひ給ひつゝ、御散歩とやら、いと心地よく候はん。涼風に裾を吹かれながら、貝を拾はれ、島山を望みては、歌を詠ませ給ふ事の、いとく羨しう候かな。

今しもさやけき月影、君が上を夢路に辿りて、その美景に憧れ居る妾の面影を、「馬鹿」と叱咤する如く、すどく照らしぬ。あはれ戀しき君よ、此の月を如何に愛ぼしてぞ。

(雨評) 今一層の奮發を要する文なり

戦地の夫に近況を報ずる文

朽木秀 子

日増に暑さのいやつり候事とて、ひねもす籠り居て扇とる身すら、いと堪へがたき今日此頃、わきて、血なまぐさき滿洲の原野に銃とりまゝ、心御身の、久しく御消息承はれば、いかに愛がせ給ふらんと、遂に案じ申し上げ候。留守宅にては、一同無事、父上の如きは、例年の避暑旅行も、軍國の事なればとて見合せられ候。一耶もこの頃の暑さに、いさゝかも弱りたるげはひなく、頗る成長いたし、玩具なども大人めきたる劍や小銃など、いたく喜び申し候。殊に貴方様の愛犬イスをば、よき遊び相手として、愛するさまのいぢらしさ、えも言はぬ心地いたし候。されば、日頃病がちなこの身も、今年のみはいと健かたに暮らし居り候まゝ、御安心下され度候。折しも夕立の雨、あとなく晴れわたたり、草葉に錦の玉ちるたそがれの慈、ひぐらしの聲なき、かくなん。かしこ。



頰蕭小説

廣津柳浪選

天

花水饅頭

岩代須賀川本町 服部水仙子

「己が孫めは、はあ番長に進みました」白毛頭をやつとチョン鬚に結ふた六十許りの大柄な爺様。

前は小川、後は菜畑、左は岩山の岩に覆いて、その岩から生へてる大松を屋根に背負つた、茅屋葺の小家、すぐ右手は縣道なので、前の川の橋、花水橋を渡つて是非とも此處を通らなければ村にも町にも出られない至つて賣れさうな店である。即ち名物の花水饅頭は此處。だから誰れでも此道を通る旅人は此小店に休んで名物饅頭を一つか二つ頰張つて行かない者は無い。

それも此店の爺が自慢話しの面白くて話好きなので有ろうが、また見晴が宜くて味もまた格別とやら。今菜の花は眞盛りである。小川の末は遠く薄墨繪の様で、蝶々が一羽ひらりと舞つて行く。小店ではまた爺が饅頭焼きながらの孫の自慢話し、客は一人、四十許りの商人躰。

「昨日手紙寄越しやしたがな、何でも其中隊が危険かつた時に、それ孫めが隊長様からの命令で大隊長様の處へ書面持つていつたやとて、それでやつと中隊が救かつた、さあ首尾よう任務を果したらうかどて曹長に進、たゞさうてがすよアハハハ、なあに是許の事ががすが隊長様のお役に立つたかと思ふと此爺の鼻が高いてがすよツハハハ、」

先程の蝶は何處へやら、今し花水橋を渡つた二人の農夫、何か聲高に語りながら來掛り、

「やあ爺どんまた始まつたかアツハハハ、」

とばかり肩の鉾を光らせながら過ぎ去つた。

「チール程そりや……そして現役かね豫備かね」煙管をボンと一つ

「なあに豫備てがすよ、去年三年勤務で歸ると間もなく召集られたてがす、普通ならばあ童の二人も有る年

「がすのよ」  
 何處の家でか雞の鳴聲、ア、と矢伸一つ後の畑から聞えた。  
 「丈夫で歸つてくみや、直に嫁貰つて呉れべしと思つて今から探してゐるのでが、アハハハハ」



日は餘程高くなつた、客は風呂敷包を取つて立ち上つた、と爺の鼻の灯提危険と見る間にポタリと火鉢の縁に落ちてチリ。  
 「アツハハハ、是こそ眞の鼻水饅頭てがすなあハハ、」

客も笑つた、饅頭を食ひながら、  
 「婆さんや早く死なれて頼むは彼ばかりてがすが、誠にはや宜く出来やしてな……なあに親は無えてがすが今は生きてんだか死んでんだか判明ましねえだ」

僅にこれだけの事、然かも筆に神あり、躍然として情景が活きてゐる。一つのむだもなく、いきに讀ませて其人を目前に現はす、確かに至れるものであるが、只小説としては餘りにあつけなく、結末が少し、わるおちしたのを難とする。(選考評)

地

○村の名物

三河 紫 琴 女 史

己が村中で名高ものは、  
 一に石塚辨天まつり  
 二には笛吹く馬かたお花  
 三に酒屋の酒呑三太。  
 満林の夕陽、木々に燃ゆる岩巻山の紅も僅であつた。消えて行く夕の光に、花は愛馬、夕雲の脊に乗りて、金襴の袋につままれた母の片身、若葉の笛を取り出だして辨天島の方へ吹き鳴らして行く。これが今では村の名物となつた

(一)

姫島のほとりが黒づんで、辨天様の鳥居の赤いのが分らなくなつた時、座翁山の麓の邊を鈴の音がした。闇のひろがるにつれて夕雲の足は次第



てあつた。馬の鈴の音ははたと止むた。

史女董白町田代千田神 [外賞] 夏 初

袋を出して頂いた。そして其の美しく唇をあてた。餘韻嫋々として寂寥の夜を響いた。夕雲は勇むて嘶いた。鈴の音がいよ／＼近くなつた時、お花は静に笛を藏めて、その美しい手で馬の鬣を撫てた。

(二)

お花が夕雲を勞はつて居ると、馬の先に黒い人影が動いた。「三さんぢやアないか」「お花さんか」「あ、」今日遅かつたのう「ホ、ホ、ホ、ちつとも遅かアないわ、常と同じ様だ」實際お花がいつも通り、別に遅いのはなかつたので三太は「ハハハハ、」笑つた。

「そんな事は什麼でも良いけど何がへつてあの事よ」